



（號八十九百二第）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年一月一日發行（毎月一日發行）

念珠ならば小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達
●御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし従來
調進仕り候へば多少に不拘御用
命願上候

京都市寺町通蛸薬師下ル
念珠 小野嘉助
電話 中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

布 眼の薬 効能、たゞれ目、かすみ
目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ
ーム等
定價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五十錢、
七拾錢、壹圓

布 血の薬 定價二包入拾五錢、十
五包入壹圓、効能、男
女ちの道、産前産後、めまい、たちくらみ、
時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人
病、貧血疾、風邪

千葉縣山武郡源村上布田參百番地藥王寺
布眼薬 本舖 齋藤 日章
（御注文は總へて下記振替に）
（振替東京第六七九一番）

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 一直に御聯想下
京都 三條通烏丸東入ル町
草木本店
電話 中七三五番
振替口座東一一五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話 話下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

●初も神佛具を調製する敬虔心を以て奉仕候●

佛像佛具 調度所
位牌木鉦 調度所
宮殿幢天蓋 一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團

京都市寺町四條南大雲院前
舊名「乾清」事 辻井岩次郎
多少に限らず御 振替大阪八一五七番
用奉願上候也 電話 話下三二五八番
●御用せ被下候は、町際深切を旨と致候●

●佛壇、佛具一切卸小賣
迄歳六五四リヨ歳三十員店
候度下被話世御名六五者之

卸部 三法堂 藤田總治
京都市三條通小橋西入中島町
長距離電話中二七三三番
振替口座東京二〇七二番
大阪四三二九番

小賣部 三法堂佛具陳列場
各宗御本山御用達
重佛表具師 同區小橋東入

錢四稅郵 表價定

生徒募集

千葉縣千葉郡千葉町院内
（千葉神社裏通）
憲兵屯所向横丁）

私立 山刺繡學校
校長 山口京太郎

規則書入用の方は御通知次第校則を
進呈いたします

統一事務取扱 東京市小石川區白山前町 統一編輯所

新年巻頭の所感

今の一月一日は泰西人の私作にかゝる太陽曆に従つて生
ずる元旦也、太陽曆は太陰曆に比して勝ること萬々なり
と雖も、之を北斗曆の萬世不易の正曆に比して劣れり。
太陽曆は我國の習慣に對して春春ならず、秋秋ならず、
二月に二十八日の不具數を生ずるなど不滿の點多し。凡
そ曆は畢竟する所天地の自然に基かざる可らず。釋迦尊、
聖孔子、聖德太子、日蓮聖人等皆孰れも實に北斗曆に依
り給ひしもの也。北斗曆に依るときは、大正九年は太陽曆
二月七日陰曆十二月十八日に當る。我等は東洋文明の權
威を示し、併せて天地の眞理に浴すべく我國の公曆の一
日も早く北斗曆に改正され、眞の正月元旦の用ひられ、
聖祖の良の義の顯れんことを祈ることや深し。聊か所感
を記す。（太陽曆九年一月一日は陰曆十一月十一日）
（北斗曆十一月廿五日に當る、冬季なり）

（松尾生）

紙本半折

御題田家早梅

王山堂主人

松尾鼓城筆



紙本半折

三保の富士

王山堂主人

松尾鼓城筆



國民思想の徹底的要求

本多日生

左は予が曾て師の講演を要領筆記せるもの、手帳より抜萃して掲ぐるものなり、校閲を経ざるものにて誤記せる點多かるべし。(松尾生)

世には神佛を間に合せのものとし、單に養錢を投じ合掌し金儲けを祈るは商人が自己の資力を利用し買占を行ふと何等選ぶところなし、其の心事の陋劣唾ふべきなり、又金儲の爲には神佛を忘れ不敬も敢て意とせぬもののあるのは何たる事か、又無暗に信心するやうでも現代の時勢も知らず巡禮となり諸國を行脚し、或は一山に籠りて祈禱一方の夢中信心、これ等は宗教の健全性を缺きたるものなり。精神界は迷信状態を脱せず、物質界は只唯物主義に趨り、遂には國家内に主

國民思想の徹底的要求

義思想の衝突を起し、國家をして危態に陥らしむる、斯くては國家の前途も寒心に堪へがたきものあり。之れを史乘に見るに國の興廢存亡が宗教の隆盛なると衰退せるに直接の關係あり、有名なる安國論に、宗教道德も國家を基礎とすべしと云ふ意味の言葉あり、洵に其言の如し。然るに一方消極的には念佛を唱へ或は座禪を組み而して餘り國家に重きを置かぬ宗旨あり、而して又今日の時勢を達観するに國家本位の思想が徹底を缺き、其精神薄らぎ、軍事教育には國家本位あれど

其他の教育には之を缺く所多し、故に今日の急務は日蓮上人に學ばざる可らず、日蓮上人が身命を國家に捧げたる精神に至つては日月と共に其光りを永久に傳ふべく、斯る上人と接近し國家的威念を養成し帝國臣民たる責を完くすべし。承久の亂に就き之れを見るに北條義時は後鳥羽、順徳、後御土門の三帝を島流とし有ゆる悪政を施き國體を破壊せり、されど一方には租税を輕減し今日の所謂社會主義民本主義(デモクラシー)の政治を行へり之は民を知つて君を忘れたる不貞なる政治なり、上人の奉ぜられたる法華經は國家全體の利益を認むるものにして人民の爲めに皇室を押込むが如き國體を破壊し皇室の尊嚴を傷くるものに反對せり。予は現今我國思想上には民主的思想と我國體との間に政治上の思想が徹底せ

ずと斷言する者なり、民本主義は人民の幸福を増進するを本位とし之を以て政治の本體を一貫するものなりと云ふも、我國體の根本に於ては上に天皇を戴き一切の問題を解決することとし、皇室に對しては絶対に尊嚴を汚さざる法式に於て一切の議論をなすを適當なりと信ず。現今の施設方針は兎角間に合せのやり方多し内治的根柢を忘れて外治的枝葉救済のみに焦慮して居るのは考へものなり。日蓮上人は我國にて行倒れ又は癩病患者を救済するのみが社會の救済に非ずして皇室尊嚴の維持を經とし國家の秩序を保つを緯とし以て社會の救済に當るべしと説けり、現時の市營廉賣を繼續せば小賣屋が困る、又廉賣せねば下級生活者が困ると云ふ如く一個々々には利害の一致せざる場合多し、故に國家は飽迄も其國の

威力を發揮し社會全體の利益を擁護せざるべからず、凡そ天地間の事總て現在を基礎とし國家本位の感化をなす事必要なり。要するに現時の急務は精神的文明の程度を高め階級を明かにせざるべからず過般米國が國民思想上に一大變動を來たし從來兎角意思の疎隔せし資本家と勞働者が漸次融和し凡て國家本位となれる傾向ありとの華盛頓電報を一讀し感慨更に深し。我國にても上下心を一にし愛國心を鼓吹し全國民一致の思想に於て國民の幸福を期待し得べきなり云々。



編輯局より

○新年お目出たうムいませす。本年も爲法爲國大に働さませう。
○寄書投稿は以來淺草區清島町一四統一閣へ。又本年以後の誌代は同統一閣、振替口座東京二一九番へ御送金を請ふ
○和歌俳句は統一誌上には載せませぬが御同好者諸君の御希望に任せ相變らず選者の御選を得、手摺の印刷で同好者諸君に限りお手下へお送りしたいと思ひますから、お望の方は小石川白山前町一七松尾敷城へ御申越を乞ふ。
○今日まで統一編輯所の方へ參つて居た原稿は統一閣内長谷川義一氏へ一時引繼いでおきました。第一回編輯會議の節松尾から會議へ提出します。

日蓮聖人教義綱要 (第廿七回)

井村日咸

第八章 修行 第八節 行者の安心

修行の結歸した所は一菩薩行であるが、此が上求菩提の信念受持の體道と下化衆生の濟世利物の用道とに分別せらるゝ、此兩面の體道を一言に南無妙法蓮華經と言ふ言葉で言顯したのが、日蓮主義の修行で、三大秘法の隨一本門の題目と言ふのである、此體用兩面の體道を適當に理解し運用して行く處に日蓮主義の大活動が顯れ来るのである、體道は本佛の慈悲と我等の信心とが結び付いて、安心立命して、我等が身心の安住處を得た處である、此安住處大安心を得た處が一切活動の源泉と爲るのである、此體道は萬世不變の妙道であつて時處位に依つて變化すべきものではない、而しながら我等一度本佛慈愛の中に蘇るを得て、光明裡中に身心の安住を得れば、其處に精神的活動を現し來り、濟世利物の動作と爲つて現はるゝ事は自然の道理である、此動作は時處位に應じて變化し活用せらるべきもので固定的なものではない、體道の信心は一定不動でなければならぬが、用道の活動は應用

無礙にして自在なるものでなければならぬ、若も此體用二面の運用が誤たるゝならば日蓮主義の信仰は破壊せられねばならぬ、體道に偏傾するならば、現迷固陋にして時代を解せざるの徒となり、用道に走すれば散漫放逸にして信仰の歸趣を失ふて迷信邪信の徒となるのである、現在の日蓮門下にして此弊に陥れるもの尠しとせず、反省を要することであると思ふ。體道の信仰に就ては前節に信仰の三義を申上げて置いたのであるが、更に三力合成と云ふ事を申上げて我等信仰者の安心の意義を明白に致して置かうと思ふ、用道の活用方面は後節にお察を致します。我等が信仰は三つの力が寄り合ふて始めて其効果は顯はることが出来る、三の内一が缺けては信仰の効果は顯はれて來ない、三の力とは第一に釋尊の本願力である、本佛世尊の毎自作是念の悲願を言ふのである、本佛の大慈大悲は常恒不斷に我等衆生の上に蒙りて、我等の道を進行せざるを知らし召して度すべき處に隨つて道を行せざるを現し給ふて、形聲の兩益を垂れ給ふことは久遠劫來未だ曾て暫くも廢し給はさ

るのであるが、其大慈悲の御恩召とは釋尊の本願力と言ふのである、此本願力が無ければ我等は永久に救の御手に接取せらるゝことを得ないのである、次に妙法の本願力である、佛は我等苦惱の衆生を救ふ給ふて之を救済せんとして大良薬の妙法を與へ給ふた、此妙法は釋尊の因行果徳の大功德を具して我等一度び妙法を信すれば、其具へたる因果の功德は我等一切の煩惱罪苦を消滅せしむるの大力用を具して居る、此力が即ち妙法蓮華經の本願力と稱せらるゝものである、此本願力と本願力の二の事に就ては前の佛論論の下と教法論の中に充分お察致してあるから茲には省略致して置きますが、此二つの力が共に我等を救ふの力である、佛教の中に自力救他力教杯云ふて彼此争ふて居る宗派もあるが、但他力但自力共に宗教としての本義を得たものではない、如何に佛陀の慈悲が廣大であればとて、其慈悲に乘托するの信仰力が無くては感應の意義は顯れて來ない、如何に我等は聰明なりとて自力にては到底解脱を得るの望は達せられない、但なる自力但なる他力は共に佛教の本意を得たものとは言へない、上に救済の力あり下に之に乘托するの力ありて始めて感應の道交するのである、本佛の本願力と妙法の本願力に乘托するの力之を行者の信心力と云ふ、信心力とは本佛の大慈悲に感孚し妙法の本願力を信託して、決定不動の信心力を以て己が一身を打委せて救済を求むるの力である、前節に言ふ處

の信仰の體性相の三義を具有したるの信仰之を
行者の信念力と言ふのである。此信念力は甚だ
強固なるものであるが、但疑を斷して佛陀の
金言を信する丈のことであるから、至極簡單な
るものであるが、救済する力が強大であるから
救済を受け得るのである。例せば本佛の本願力
は汽車の機関師である、妙法の本願力は車室で
ある、我等は乗客である、若し此汽車無かり
せば我等一日十里程の歩行を餘儀なくせらるゝ
のであるが、汽車のあるありて一歩も歩まずし
て數百千里の彼方に達し得るのである、然し我
等が身體は自ら之を車室に運ばねばならぬ、車
室に運び入れて托送の手續を済すまでは我等の
力に待たねばならぬ、ボカンと立つて居るのを
彼方から来て乗せては呉れぬ、乗る丈は自分で
乗らねばならぬ、一旦乗つた以上は寝て居ても
大丈夫目的地に運ばれるに相違ない、機關師が
責任を負ふて安全に目的地に達せらるゝに相違
ない、機關師と車室と乗客とが揃ふて其目的
が成就するのである、此例を充分味ふたならば
三力合成の意味は分りに成らうと思ふ、壽量
品は良醫と良藥と病子とに譬へられてある、御
遺文の中に母と乳と赤子とに譬へられてある、
(法蓮抄)又聖恩問答抄には崖の上の人と崖の
下の人と而して其上下の人の中介者となるべき
綱とに譬へられてある、此等の例は何れも此三
のもの揃ふて目的を達し得るのであつて、離れ
ては役に立たぬと云ふことを示されたのである

斯様に我等行者の信念力が、本佛の本願力と妙
法の信力とに乘託して信心決定の當相を名字
即佛の位と云ふ本因妙位に安住すると言ふので
ある。此場合に於て最早我等は成佛の一大事を
決定して居るのである、故に此信念に安住する
を受持成佛と云ひ信念成佛と云ふのである、我
等が此信念を持続して最後臨終の時まで至
り得るならば、其最後の時に於て本佛の御膝下
に直に至り得るのである、開目抄に
我並に我弟子諸難ありとも疑ふ心なくは自然
に佛界に至るべし。(編遺八一九)
と仰せられたるは此儀である、聖人は我等が最
後臨終の時の様子を示して曰く
但在家の御身は餘念も無く日夜朝夕南無妙法
蓮華經と唱へ候て、最後臨終の時を見させ給
へ、妙覺の山に走り登り、四方を御覽せよ、
法界寂光土にして瑠璃を以て地とし、金の繩
を以て八つの道をさかひ天より四種の花
り、虚空に音樂聞へ、諸佛菩薩は皆常樂我淨
の風にそよめ給へは、我等必ず其數に列な
らん。(編遺一六三六)
と、如説修行抄に曰く
日蓮並に弟子諸難共に霜露の命の日影を待つ
計ぞかし、只今佛果に協ひ寂光の本土に居
住して自受法樂せん時汝等が阿鼻大城の底に
沈み大苦に値ん時、我等何計無慘と思はんす
らん、一期を過る事程なし何に強敵重なる
も努勞退く心なく恐るゝ心なかれ、縦ひ頭を

第四節 正助の二行

我等が成佛の大事は信念決定の當初に於て、既
に確定して居る、聖人は持法華問答抄に
命已に一念にすぎざれば佛は一念隨喜の功德
を説き給へり、若し二念三念を期すと云はば
平等大惠の本誓願頓教一乘皆成佛の法と言
はざるべからず。(編遺四七四)
と仰せられてある、最初の一念か成佛の因と成
るので第二念第三念を必要としないのであるが
我等は凡夫である、既に成佛の大事決定なりと
雖ども、淺きにも時に異縁に紛動せられて冷熱

常ならざるものがある、そこで我等は一度決定
信を得たればとて安心して居る事は出来ない、
少しでも油断をすれば、其間隙から惡魔が手を
延して退轉させやう中止させやうと仕て居るの
である、天台大師は三障四魔紛然として發起
ると、止觀に書かれたましたが、或は迫害を以
て或は誘惑を以て此信仰を扇壞せんと計るので
ある、聖人開目抄に嚴戒を垂れて曰く
大願を立ん、日本國の位をゆづらむ、法華經
をすて、觀經等について後生を期せよ、父
母の頭を如念佛申さずば、なんどの種々の
大難出來すとも智者に我義破られずば、用じ
となり、其外の大難風の前の塵なるべし、我
日本國の柱とならむ我日本國の眼目とならむ我日
本の大船とならむ等と誓し願ふるべからず
(遺八一八)

爲るべきが正行で、其正行を助けて力添を
して行くのが助行である、其形式を擧げれば
である、受持の一行は我等が信仰を持続する處
期ち受持經である、此信念を言で顯すのが唱題
の行である、唱題の行は信念其物を言葉の上
に顯はしたのであつて信仰以外の別種の物では
ない、唱題は信念ある以上絶対に必要とはせな
いが、大聲を以て唱題すると、言ふことは我等
の精神を統一し邪念妄想を打拂ふに於いて大に
力あるものである、我等根鈍なるものは左様な
事柄に依つて漸く精神を統一し得る程幼稚なも
のであるから、本法時機相應の行法として唱題
の行がある所以である、唱題せず顯轉たりとも
信仰の維持を爲し得る人には其効果には異目は
無い、隨つて數を多く唱へると云ふことは必
しも要目とはしない、精神の統一なき妄想を浮
べながらの唱題は何處萬遍唱へたりとも何等の
効果はない、御遺文中に數多く唱ふべく御勸獎
の場合もあるが、此は淨土門に於て念佛數萬遍
杯と云ふに對する時の御主張で、教義の本義よ
り出でたものではない。
助行と云ふは、我等の信仰を維持し退轉せざる
様に常に其意義を讀誦するも講説するも其目
的は正行の信念を増進せしめて行くもので無
ければならぬ、そこで同じ經文を讀むにも、其

經文の意味が我等の信仰に直接影響を與ふる
ものでなければならぬ、我等が信仰が本佛の
本願力を感字し妙法の信力に信賴する以上
此意義を最も直截に御説に相成つた壽量品は最
も親しき御經文であるから、助行の中に壽量
品が一行正行の御題目に近い、それから、自
分の體を説明することに最も委しき方便品
の開權顯實の文である、これを壽量品の次に助
行とする、其他の御品は前二品の次に置く様
に同じ助行でも信仰に最も親しき意義あるもの
より次第を立て、行くのが助行を用ふる方式で
ある、此用の方を誤ると信仰を破壊するの結果
を生ずるが故に嚴重に戒められてある、此關係
を表示すると
修行 正行 南無妙法蓮華經
助行 正行 方便品(述門の肝心)

と日本國の位をゆづらむとは誘惑なり、父母の
頭を如んとは迫害なり、斯る誘惑迫害に打克つ
て此信仰を維持するには非常な大決心を要する
のであるが、我等が精神は常に動搖して止らな
いからして、其間に邪念妄想の紛起することが
多い、そこで常に紛起する邪念妄想を打拂ふ必
要がある、それを打拂はねば遂に其妄想邪念の
爲めに信仰を退轉する様な場合が出来るのであ
るから、常住不斷に信仰維持の爲めに努力せね
ばならぬ、其信仰維持の方法として定めたのが
正助の二行である。
正助の二行とは正しく其信念を維持する因縁と

正助の二行とは正しく其信念を維持する因縁と

であるが、此等は餘程疎遠なる助行である、然

し信仰の敬虔なるものは崇高なる莊嚴より生ずるものであるが故に斯る形式も相當考慮を要さねばならぬ事を教へたものである、此等も絕對必要のものではない、時と金とが許すならば大に行るべし、許さざれば必ずしも行するには及

人心動搖の支點

醫學士 永橋 榮 治

對獨休戰條約締結より年餘、其平和會議終了より半年餘、而して世界の形勢は如何、我國の現狀は如何、露國の動亂は何日果つべしとも思はれない。そこへついで獨逸は西境から有形に無形に侵入して、露國を政治的經濟的に利用しやうとしてゐる。其將來は決して輕視することを許さない。聯合國中伊太利、ルーマニヤ何れも媾和條約を無視して、勝手に我利的活動を敢てしてゐる。又米國の好景氣は忽ち勞資相互の反目となり罷業となり動亂となり、更に革命的の色彩をすら帯びやうとしてゐる。此の世界的大動搖の中に在つて、國際經濟及社會問題を考ふる時、日も英も佛も列強何國と起して前途樂觀すべきものがない。山東問題が惹起した道義支那の排日大騷擾と云ひ、獨日發表せられた朝鮮獨立の陰謀と云ひ、其黒幕に某國

の教唆宣傳あるを思ふ時、さては現下對支借款の國に關しての日本不調和の將來を考ふる時益々吾人の憂慮を深からしむるものがある。資本的經濟的に世界殊に極東の制覇に着手した米國は一方軍備殊に太平洋の制海權を握るべく海軍根據地の設置、大艦隊の編成を開始した英國は媾和條約によつて獲得したメソポタミヤの天産の寶庫を手に入れたのみならず、之に依つてペルシヤ、印度に對する本國の制權確保の連絡を得るやうになつた。佛蘭西は今次の戦争の報酬として獨逸が第一の富源としてゐたアルサス、ローレンを取り回へして、將來の發展大に嚆矢すべきものがある。遮莫、何れの國の富も軍備も國民思想の動搖の前には何等の力を持たない。而して列強中其の國富に於て最も劣り、其國際的地位に於て最

も乏しく、更に國民精神に於て最も輕く雷同し易い日本は何國よりも最も痛切に世界の大勢たる人心動搖の前に警戒一番しなければならぬ。吾人は決して保守主義の徒でもなく、偏頗狹量の輩でもない。世界同胞主義位は勿論吾人の理想である。彼の佛蘭西革命に先立つて其の精神的誘導者となつたジャン、ジャック、ルツソールは「自然に復歸せよ」と叫んだ。然し吾人は彼の言つた自然の解釋には賛成出来ない。何となれば自然は絕對的自由平等の一面のみを示してゐないからである。ルツソールの著「不平等の起原論」民約論等は堂々の議論ではあるが、吾人としては自然は平等と差別と兩面相合して劫久の調和的活動をやつてゐるものと考へる。自然は恰かに平等の裡に不平等を持つてゐる。哲學的の證明などは喋々せずとも、現に人類が棲息する地上には山野河海の凸凹があるのではないか。動物植物には大小強弱があるのではないか。人間の體格、智能に上下あるのではないか。又假令サンシモンの社會主義が要求するが如く、現今の私有財産制と自由競争制との並行を廢し、資本家の組織を禁じ、各人の勞力に相當する所得を與ふことにするも各自才能の相違は忽ちして相互財力の懸隔を招來して、必

ある點に於て全く無差別でなければならぬ。斯かる兩面の實在を辨へないで、絕對的平等のみで社會を律しやうとするから、勞働者が資本家を妬み、腰辨が重役を羨み、民人が君主の存在を云々するやうになるのである。健全なる自由は然る秩序を要件とする。自由平等は決して不規則放縱を意味しない。智識に於て秀でたる者は指揮者として其天分を盡し、體力に於て勝れたる者は現業員乃至被指揮者として其職分に勵み、富者は資本家、貧者は被雇人として共に與に國家的の進歩に努めなければならぬ。弱者にして強者を希望するならば自ら體育に吾身を鍛へなければならぬやうに、權勢や富貴を欲する者は之を退け減ぼさうと云ふ卑怯を棄て、自ら高官たり富豪たるべく努力すればよいのである。然るに自己の不敏にして其目的が達せられないからと云つて、社會の秩序を亂し、以て他人の所有物を間接に掠奪分配して一時的の平等を實現しやうとするのは穿き違へたサンチカリズムと云はうかボルシェビズムと云はうか、當に唾棄すべきではなからうか。

した人種平等案が通過を見るに至らなかつたのも其一證左であらう。又聯合國側が媾和條約として之に從はしめて和解しておきなから、戦後獨逸製品に對して聯合國側は差別的待遇をコトをしやうと英米は提唱して現在之を實行してゐる。そこで獨逸商人は製品に瑞西や伊太利の商標を附して世界市場に販路を求めてゐる事態既に然り、以て列強の高唱する正義人道、自由平等も如何なる底のものか推察するに難からぬ。如斯平和となつて却て戦時中以上の猛烈な國際戦が行はれてゐるのではないか。獨り經濟戰計りではない。更に衷心すべき宣傳乃至民心動亂の計畫が陰に陽に實行せられつゝある。日本は國力に於ては列強中末席である。島帝國が唯一の支柱は國民精神の一致統一にあつた。即ち我國體を尊重する心から灌輸した忠報國の精神たる赤誠の力であつた。今や我國の精神状態は、如何に外來思想の不消化に食傷し、外國の宣傳誘惑の手に乗せられて國家觀念の動搖を來さんとしてゐるではないか。陰蔽せられたる此の動搖が一朝國民大部分の輕卒なる雷同に因つて勢を得むか、蜻蛉洲も大和島根も忽ち洋夷の乗する所となり、一寸の地も碧眼赤髯の足跡に蹂躪し盡さること火を語るよりも明かである。實に二千五百年我父祖の國は果卵よ

吾人は前述の通り決して精神的鎖國主義者ではない。然し米と云ひ英と云ひ佛と云ひ國力日本に優越せる列強が未だ國境と國籍を無視するに至らぬ今日に國際的の後援もなく、國家的財力もない貧小な日本が獨り世界同胞主義を實行するには時機尙早であり、忽ち祖國の危險乃至滅亡を將來するものである。人種平等は日本國民の目的であり、世界同胞主義は大和民族の理想である。健全なる宗教の宣傳或は一般精神文明の向上覺醒によつて世界人類が四海同仁の大悟に徹底し、地球全面が皆歸妙法の理想境に改造せられた時、地球全面が皆歸妙法の理想境に改造せられた時、吾人日蓮主義者の究極の目的の達せられた時である。人類を忘れ國籍を撤回して均一の人類として吾人が全世界に大慈悲を澆治すべき時である。日本國民進んで自由平等主義の先者となり、一視同仁の明君たる日本陛下を世界大共和國の精神的大統領と仰ぎ奉るべき時である。斯くてこそ日蓮主義者の愛國主義國家主義は四海同仁永久平和の釋迦の心を現在に實現すべき宏大無邊の大理想であることを證明し得るのである。吾人は尙早に不健全なる外來思想に雷同して六千萬同胞の將來を危うするの愚を戒めて、堂々たる日蓮大聖の先覺を鎮仰し、以て人類同愛の大理想に精進すべきである。(大正八、一二、五稿)

民主主義者乃至社會主義者が主張擁護の料とする世界同胞主義は成程結構である。然し少くとも萬國現在の人民の世代が交番するまでは世界同胞關係が國家及民族的觀念を無視し得るまでに徹底して實現されなことを明言するに躊躇しない。巴里平和會議で牧野全權が提出

りも危きクライシスに在るのである。

七

基督教徒としての大矢氏に與ふ

金島 英夫

金島君は帝大經濟學部にある學生である。本年夏樺太で同地唯一の讀者を以て誇つてゐる大矢教香とかいふ牧師が基督教萬能論をかいたに對して金島君は「我觀日蓮主義」と題して樺太中央新聞へ九月十一日から十月二日まで連載し、基督教を駁撃すると同時に日蓮主義を高調した。それが導火線となつて奥瀬といふ人も金島君に呼應して聖書の矛盾を論じた。大矢牧師は金島には駁論を書かなかつたが奥瀬氏には反駁した。其奥瀬氏への駁論の中に一箇所金島君のこともあつたので、金島君は更に十一月二十五日から樺太中央新聞へ駁論を出した。其原稿を予は手に入れたから、日蓮主義者として痛快なその筆を壯としこゝに掲げる。(松尾記)

○私は曾て本紙(樺太中央新聞)上に於て「我觀日蓮主義」と題して卑見を述べた一青年で、經驗に於ても、學問に於ても、將た德行に於ても大矢氏に對抗するに足らない事は自ら之を知つてゐる。けれど私は樺太中央新聞社の社友としてまた「我觀」の文責者として一言大矢氏に質さなければならぬ。

○大矢氏が奥瀬氏に對して發した全文に對しては、目下多忙な私をして感想を述べる時間を與へしめないし又クリストの系圖争ひごときは殆んど無意味に近いことだから今はその問題には觸れないで、茲には十一月三日の同紙の記事、殊に私に關した處だけに止め、それに附け加へて耶蘇教に對する感想を誌したい。

○大矢氏は西洋文明は最密なる意味に於て基督教文明である。と云ひまた西洋文明を説明して余の所謂西洋文明とは單に科學上の新發見や新發明を意味しない。

○何といふ撞着した言葉であらう。現在の西洋文明は殆んど新發見新發明による科學の文明ではないか。現在の泰西文明から科學の文明を引き去つてあとに果して何が残るか。○蒸汽機關と云ひ、電氣機關と云ひ、其他現在地上に於て運用せられつゝある所有活動は、ニュートンの物理學の三大法則に立脚し、そのニュートン・フイジックスはガリレオ等の「新

ダーウキンの進化説が聖書示啓の眞理に反すと見て恐惶を覚えた若干の教會者はあつたらう。而し聰明なる多數の基督教者は其様な説の爲に動搖も狂氣もしなかつた。

こんな論法を以て明白なる史實を否定しつゝ進めて行く大矢氏と論ずるのが、私は如何にも馬鹿々々しくてたまらない。大矢氏は一體誰の西洋史を讀んだのだと反問したくなる。

○ダーウキンの進化論で驚いたのが如何に大であつたか、基督教は根底の動搖せん事を恐れて如何に反抗したかといふ事實は、局外中立で公正なる讀者諸賢の批判に仰ぎ、その證左は西洋歴史の史實の數々に依りたい。

○大矢氏は又次の様な事をも云つてゐる。聖書の眞理は進化の法則を受容して神々餘裕がある私は問ひたい。ダーウキンの進化論は今日の科學の二大不滅論、即ち物質不滅とエネルギー不滅と合致してゐる。従つて無から有を生ずる事を否定する。

○然るに基督教は聖母マリヤから、父なくして生れた。ダーウキンの説を受容して神々として餘裕あるといふ口の下から、明に此説は大矢氏に裏切つてゐる。

○次に大矢氏は私の所説に對して漫罵的に無責任な傍評を試みたに過ぎないので余は黙して應酬しなかつた。

基督教徒としての大矢氏に與ふ

へなかつた理由である。○第一の點を質したい。私は無責任ではない答である。私は署名して論文を發表したが故に筆者としての責任を負つてゐる。

○また内容に於ても私の論には一々論據があつた。即ち、植公が七度生れて此賊を亡ぼさんといふのは餘りに徹に執着した言葉であると云つて捕公や、廣瀬中佐の「七生報國」主義で成立してゐる美はしい護國の精神を嘲つた牧師平田氏の事を擧げた。

○七曜はキリストが生れぬ前からユダヤに在つた習慣である事を忘れて稍もすると基督教徒はパイブルを通信して日曜は神の與へ給ふた休日であると能く云ふ。そして私の知れる或る兵卒が、日曜は神の賜はつたお休みだといつて、上官に反抗して僅かばかりの勤務にも従はなかつた例を擧げた。

○私の親戚の法學士で御大典當時某縣の理事官をしてゐて、奉幣使に立たなければならぬ時自分は天にまします唯一の神ヨソド以外は何も信ぜられない、日本の偶像の宗教を信じ、奉幣使に立つ事は能きないと云つて之を拒み、官職を去つた一人の例を述べた。

○キリスト教の人々は根本的思想に於て我國體と相容れない。わが祖神、天照大神は神ではないといつて斥ける例として金森通倫氏をあげ其著「信仰のすゝめ」を引證した。

○東京在任のある宣教師が、二月十一日の紀元

發見に依ることは、少しく科學を研究した人ならば何人と雖も否定す可らざる所であるが、博學なる大矢氏は東抜、殆んど驚嘆に値する意見を以て之を否定せんとしてゐるその勇氣には驚かざるを得ない。

○次の様な疑問を發する人が若しあつたとすれば、大矢氏は如何の辭を以て答へんとするか。「大矢氏が西洋文明の源泉が基督教だと論ぜられた時、金島氏は源泉と云はんよりも寧ろ科學の文明を迫害したのはキリスト教であるとしてガリレオを牢に入れた例を引かれました。處が大矢氏はいや西洋文明とは科學の文明を云ふのではないと申されます。

○それなら西洋文明とは科學の文明を抜にしたあとの残りだけ基督教の大感化を受けたのだと仰せられるのですか。○西洋文明と申せば、古來平面だと思つた土地それは球形をなして太陽の周りを轉つてゐるとか、二つの物體の間には引力があつて質量の相乘積に比例し、距離の自乗に反比例するといふ説、あんな新發見から出た文明、あの汽車も、飛行機も西洋文明ぢや無いのですか……

○電信も電話も新發見だから之も西洋文明の賜物ぢやなし、基督教に、哲學は無いといふ相ですから、それぢや西洋文明とは何と何とですか大矢先生その西洋文明の見本を一寸御見せ下さいませんか」と問ふ人があつたら何と答へる。○大矢氏は又次の様な事を云つてゐる。

節に國旗掲揚を拒んだ例を擧げた。○是等の例を擧げて私は、國體に合せぬ基督教は殆んど信教の必要なきのみならず、國家、而も道義的成立のわが國家を危うするものだと論じた。

○何が漫罵であり、何が無責任であるか。何れの點に於て諷つてゐるかを大矢氏は何故指摘しないで漫然「漫罵」といふ字で逃げんとするか。○第二の論點たる答へなかつた理由としては、漫罵的傍評だから答へなかつたと明言してゐるが、私は前述の通りに一々論據のある例證で眞面目な積りである。

○何となれば大矢氏に對して個人として怨恨もなければ、大矢氏を問ましたからと云つて私に何の手柄となり得るか。○たゞ利害や、名譽を顧みずとも、捨ておけぬことは國民思想を危殆ならしむる事にある。其點に於ては、私には國恩を報じなければならぬ爲に之を放置する事は能きない。論聊か過激に互るとも其れは決して漫罵ではない。

○茲に例話を一つ引く事を許して欲しい。雨ふりの日に、別に惡意もなく日常の挨拶として、「今日は悪いお天気でういます」と云つたお客の言葉が漫罵だと思つて「何だい雨の降るのが何故悪い」と吐鳴りつけた雨傘屋があつたといふ。大矢氏が漫罵だと思ふことも勝手に漫罵だと考へる主觀的自由ではあるが、よく考へないと人は飛んだ物笑になる事を忘れてはなら

ない。

○さて、よし一步を譲つて漫罵だと假定して、漫罵なるが故に答へなかつたと明言した大矢氏は、若し漫罵で無かつたら私に反論を書く管である。茲までは大矢氏が承諾しなければならぬ。然るに、樺太日々新聞の八月十二日の第一面には次の如き言葉が大矢氏といふ署名の論文の中に發見する事を讀者諸賢と共に私は驚く。

○然るに、樺太日々新聞の八月十二日の第一面には次の如き言葉が大矢氏といふ署名の論文の中に發見する事を讀者諸賢と共に私は驚く。偶々自分の意見なり感想なりを公表する場合は最初から多數の反對者を豫想し乍ら論者千の共鳴者を得たいといふのが私の期待である。

○如何なる反駁があらうともといふ主義で書かなかつたのか『漫罵的傍評なるが故に』書かなかつたのか。その何れかを問ひたい。

○前後言葉を左右にし、言を食むとは、大矢氏は牧師として、また人間として良心の所有者であるか否かをさへ疑ふ。

○三ヶ月以前に『今後更に論争に携はりたくないと云ふ』可なりひどい文字『全く無智』だとか『識るべき半をも識らざる』とか『淺薄極まつたる』とか『神經衰弱、症に罹れり』とかいふ言葉を奥瀬氏にあびせつゝ論争してゐる。その癖私に對しては漠然と漫罵的といふ字を以て

逃げを張つてゐる。私の論が漫罵か、氏が奥瀬氏に加へた言葉が漫罵に非ざるか讀者諸賢の批判をまつ外はない。

○次にまた大矢氏はこんな事を書いてゐる。金島氏にせよ、奥瀬氏にせよ、稱もすれば國體を云々して基督教を攻撃せらるるのであるが、敢て問ふ何故に基督教は日本國體と相容れないか。

○夫れは基督教徒が有する根本思想が國體に合せぬことが私の基督教を攻撃する所以である。且教義に於ても啓蒙的方面に於ても大乘佛教、特に一乘妙典を信解した眼からは之を折伏せず

にゐられない。○國體に合するとか合せないとかいふ事は一片の空論ではない。會て『我觀日蓮主義』中に於ても此論に於ても基督教徒の多くの背徳行為が國體に合はない事を列舉した事實に於て私は之を證してゐる。

○大矢氏は更に聖書の發行高と頒布高とを擧げて、聖書の効能書たらしめんと試みたけれど、是れは殆んど見識に類する企にすぎぬ。

○若しも頒布冊数の多少で其内容の哲學的、學問的價値が定まるとせば、聖書より遙に出版部數の多い神史野乘、講談小説雜誌等は最も權威あるものでなければならぬ。

○却つて通俗的に一般化してゐる事は内容の深遠を裏切つた反證とこそなり得れ、その宗教的價値とは全然交渉のないことである。

○例へば小乗經の阿含經が、丁度バイブルと

日經上人と慶印日忠に就て

中村 日錦

宗祖滅後六百三十有八年、此間而強毒之の大旗を空中に翻し、法華折伏破權門理の大綱を振りかざし、四箇格言立正安國の大義を宣揚して眞日蓮主義純乎たる大日蓮の理想を弘傳したりしは只々吾門の常樂院日經上人其人なる乎上人洛陽六條嶺に則削の慘刑に處せられ、更に山陰北津を流し遂に加州に化を他界に遷してより春風秋雨三百遠忌を迎へ、吾總本山妙滿寺は歴代削除の上人に特に報恩法會を厳修し、上人の開創に係りて其名を憚りし寺院は一齊に上人の開基を公稱し、千葉縣四百の寺院は聯合大法會を嚴修して其の不惜身命の行者日經上人を追慕讃仰するは、大正の御代に於ける一大痛快事なりと共に思想界大混亂の時も時三百遠忌を迎へるは、吾人日蓮主義者を鞭打し覺醒を促すもの冷水三石の感なくんばあらず余が率ふる信行會員又上人を追慕し法要を修し進んで上人の講演を請はる、上人傳は世上數種行はれ余は其の最も信憑すべき上人傳を聞覽し進んで他の参考書と對照せん乎、忽ち上人と慶印忠師の關係に於て疑點生ぜり、傳記に云ふ『慶印日忠は小野治郎右衛門の長子にして早く佛道に入

りし者上人は治郎右衛門の二子なり故に俗縁より云ふ時は上人は日忠の弟子にして入法より云へば上人は師道にして日忠は弟子なりと余は此の記事を疑ふ者なり、次下其の理由を記して些か愚見を開陳し讀者の教示を乞はんとす、云ふ迄もなく淺草新谷町の慶印寺は小野氏産慶印日忠師の所化名慶印を以て寺號とせるは論なき處なるも、上人が忠師と俗縁關係ありや否や若しありとせば上人は慶印忠師と叔甥の關係にし、忠師を以て長子と定むるは當を得ざるべしと信ず、即ち上人は元和六年霜月廿二日六十一才を以て遷化せられ、忠師は五十年後の寛文十二年十一月三日を以て遷化せり、假りに上人を忠師と同年月に出生せんか忠師は百十歳後の人となり亦上人より年長なりと斷ぜば其の長壽を疑はざるを得ず、謂んや上人在世當時は吾宗門の錚々たる少からず入藏日善師あり、姫路の妙立寺岡山の本行寺豊橋の妙圓寺を創せる一音院日圓師あり、檀林開基の日純師乾龍日乘存泰日要の兩師、忠師に先じて總本山瑞世の湛育日迂師の老齡を以て總本山貫主たらんは事實あるべか

同じく日常生活の規矩を主として説き甚だ卑近の譬が多かつた爲に俱舍宗となり、成實宗となり律宗となつて大乘の華嚴經から起つた華嚴宗一派以上に流布した形のあることを以て、直ちに小乗は大乗よりも宏遠な思想だと説き得ないと同じである。

○苟くも識者を以て自ら任じてゐる大矢氏は、こんな小供だましの如き言葉を以て、わが樺太人士を馬鹿にして呉れては困る。樺太にも尊敬すべき幾多の思想家もあれば、尊むべき多くの實業家や官吏がある。

○大矢氏と云へば樺太に於ける識者だ、やれ禁酒運動がどうの、衣類に焼け穴がどうの、日本の衣服は不便だのと氏の一言一行は樺太の新聞識者の言として掲載された程の人物で、庶幾はくば識者たるに恥ぢない論をして欲しい、尊むべき樺太の人士を愚にせぬだけの論がして頂きたい。(未完)

らざるを信ず、更に上人は石田三成小西行長等の誅せられし慶長五年關東十ヶ寺の一なる土氣善勝寺より總本山妙滿寺に瑞世給四十才なり若し忠師七十才を以て遷化すとせば此時漸く十才に過ぎず六十才とせば嗚々の聲を上たる年なり而して上人家康に對せし幾度なりや不明なるも若し慶長年間特に江戸城改修の時代ならんか忠師は七八才若くは七八才に過ぎず、以上列記の事實を眞なりとせば、上人と慶印忠師との關係疑雲いよ深きを思ふ敢て讀者の教示を希ふ(大正八年十二月記)



◎編輯局より(其三)

○二月號からは、本多日生師自ら主幹として之を監閲し國友文學士編輯長として精力を盡される事になりましたから必ずや内容は豊富充實、體裁亦清麗を加へ、新裝美々しく現はれることを證言してをきます。

機微譚語

山根青村

●百回に達す終り●

九九 箱根の雲助

黒板博士の函遊覽誌にいと面白き挿話あり抑々雲助なるもの、資格に三あり一、力強からざるべからず二、荷造り巧みならざるべからず。三長持歌上手ならざるべからず。其呑む、打つ、買ふの三道樂は免るべからざるの附屬物とかや。或時駿府浪花屋の主人、大雪の折柄止むなき商用にて江戸行を企つ、三島驛よりして所謂箱根の雲助なるもの、駕籠に乗る、駕中其携へ持てる酒、煮菜、焼飯を出し、惜いけれど雪の中骨折りの勢にとて雲助に分與す、雲助手に受け受けなしと押敷き、打返して見て心得ぬ顔に飲盡し食ひ盡し、さて云ふ様止なり。我等は斯る食食にては腹破れ力落ちて産業一日もなり難し、鮮魚鳥肉山氣に胃されず寒冷に傷けられずと。折しも小田原の驛夫を尋ぎ來るあり、指して曰く、彼等は妻子にせかれ美食する能はず、見よ氣衰へ精薄く肘にも頭顱にも雪積れるにあらすやと、浪花屋主人只見れば、自ら駕せし所謂箱根の雲助なるもの、肘も頭顱も絶へて雪なし、雪なきにあらす全身の活力力、涙れる身の、降り来る雪忽ちにして消え失せけるなりと。

なりと。實にや肉體は營養の充否によりて爾かく天地の相違を來す、營養不良の身至竟何事をか遂行し得ん、精神亦然り、修養果積信心深厚の所謂充實生活をなせるもの、惡魔災難窺ひ寄り迫る處に當り來るも、忽然として消え去らんなり。聖語 當世日本國に第一に當める者は日蓮なるべし、命をば法華經にたてまつり名をば後代に留むべし。(開目鈔下)

一〇〇 麒麟兒卜傳

近江の琵琶湖に無手勝流の巨石を投げて生兵法の大馬鹿三太郎に地踏踏を履ませ、餘波傳々今猶ほ滋賀の小湊ゆるぎ止まぬ劍客塚原卜傳、かれは眞に職世の傑物なり、案するに卜傳名は勝義小字小太郎、常陸笠原の城主(八十三萬石)佐竹右京大夫義繁の國老にして同國塚原五萬石を領せし塚原土佐守の次男なり。天文元年小太郎八歳の時、出入の商人留作の一子新吉(十三歳)夜叉ヶ嶽の麓に於て、狼の爲に交み殺さる小太郎父に問ひけらく狼と云ふ者は女子供に害をなすものによと、父答ふ然ともく其故其方も氣をつけて、ゆめ夜叉ヶ嶽の方へは行くま

じきぞ、仰せ長まりましたが、併し萬一其狼が突然私の足か手に咬みつきましたら如何致しませしやう、父以爲らく子供と云ふものは色々の事を聞くものなり、生中呵るよりは教ふるに如かずと、あるかも知れない夫では云ふて聞かずが、萬一咬み付たら其儘其足なり手なりを抜いては可けない、勇氣を起し痛苦を堪へて、力任せに其手を眞の咽喉へ中深くグイグイと押込み、然して何物か手に當るものあらば、それを掴んで力一杯締め上げべし、息の絶へるを待ちて引出しさえすれば、無手でも決して恐るゝ事なしと、小太郎聞て難有と一體を演べ席を退きしが、時正に黃昏急遽夜叉ヶ嶽に登り、大聲怒鳴て曰く新吉の仇敵義、狼來れと、一疋の怪獸悠然出づ、小太郎乃ち右の手腕を前にねつと出す、狼得たりや應と喰ひ付く、小太郎父の教示の如く勇を鼓し痛苦を忍んでグイグイ押込む、狼氣管を塞がれて勝手悪しく眼を白黒して逆退す、小太郎此處ぞと押しして、巖石の突角に壓迫し、其齒はれる所を横腹目掛けて右手に小刀をツブリ、又候一疋出で來る、何を小狼なと彼奴の咽喉目掛けて力任せに小刀を突出す、嗚ひは遠はず貫き留めて鮮血逆り出で驚死し畢んぬ。斯くて八歳の小童健氣にも美事夫婦の狼を退治し、藤葛を切りて一疋宛其端に括りつけ、之を肩にする、山の半腹まで引摺り來りし時、小太郎の歸宅を案せし家人郎黨若しやと夜叉ヶ嶽に尋ね來りしに邂逅し、人々其

大膽に呆れたりとぞ。崩檀は二葉より響はしく蛇は寸にして人を呑むとかや、八歳の頑童沈勇富才猛獸退治の怪筆を敢てす、後年上州其輪上泉伊勢守秀徳先生の高足として、普ねく天下を歴遊し雷名一世を離せしも實に、思ふに人の世にある、平坦々にして一生を終るものは少なく、障害災厄は有り勝つて一生を終るものは多くは其障害に閉古垂れ災厄に壓伏せられて、意氣銷沈ア、と嘆嘆の聲を放ち、未だ大事を盡さずして使らに神佛の加護を俤得ず、何ぞ意氣地なきの甚しきや。由來惡魔の襲來宿罪の突發之に閉口垂れ舞をつけて堪つたものは、手を奪はれ足を踏がれ果ては全身心を蠶食し盡されなん、宜しく始めより耐難の勇氣を養ひ、否寧ろ耐難とよりもより以上難退の準備を整へ、夢寐猶ほ此覺悟を忘れず堅實の信仰に住して、イザ來い來れと當方より敵を壓迫撃破するの用意肝要なり、勿論人生の行路出來事一律ならず、天から相手にせずヒラリと身をかはして其鋒を外すべき事あり、又は斜めに之を受けて敵の邪氣を過すべき事あり、されど事苟くも信仰に關し正義の消長に關する限りは、正々堂々勇を鼓し苦を忍んで戦はざるべからず、寧ろ進んで單身敵中に突入し、押し

を合はす世の中、偶々ト傳幼時の逸話を聞いて、左掲聖語の一入貴きを感じぬ。聖語 各々獅子王の心を取出して、如何に人おどすとも恐ること勿れ、獅子王は百獸におぢす、獅子の子又かくの如し、彼等は野干の吼ゆるなり、日蓮が一門は獅子の吼るなり。(聖人御難事)

左の數文は本宗諸龍象數十人に對つて原稿紙二葉を送り特に寄稿を得たるもの、中なり、餘は次號より順次掲出すべし……(一記者)

信仰之生活化

能仁事一

物質的偏重の行き詰りの今日には、精神的方向が、強く弱く力を持たなくてはならぬ、今更に信仰の大切なことは、萬人ともに異論のないところであるが、その信仰が佛陀にのみ據けられて、吾人の日常生活の事に、直接の關係を持たないのと、妙いとはいかにも憾みある信仰である偏重な信念である。世の人々が不備試見の宗教心と嘲けり、不整なる信仰を笑ふのも、信仰が生活とかけはなれてゐるからである、日蓮上人が世法と佛法との關係を教へられて、眞の佛法には世法を攝め

眞の世法には佛法と合するものであると示されてゐる、御みやづかいを法華經とおぼしめせ、一切世間治生産業皆實相と相違背せずとこの聖訓を信解した時に、眞に力ある信仰が生れるのである、有象無象に現れてゐる社會問題の解決は、私利私見の人達が、どんなに騒ぎまはつたて、法華の大教義にふれない間は解決は得られない。

所感

萩原日道

現代人の新しき叫びは、猫鼠の如くにして、日々々々變るが故に人心を統一し之に慰安を與へ眞の幸福を得せしむること能はず、最も新しきものは最も古くあらねばならぬと思ふ、宇宙法界は實在常住なればなり、而して現代は矛盾の多き世なり、愛國を論ずるものは亡國の基をなし、平等を主張するものは不平等に陥り、自由を叫ぶものは自由を害し、開放を叫ぶものは束縛をなし、労働問題を叫ぶものは増給のみに偏して物價を暴騰せしめ多くの消費者を苦しめ、共産主義を唱ふるものは不共産的なり、禁酒を論ずるものは禁酒をなさず、道徳を説くものは不道徳なり、衛生を論ずるものは不衛生なり、人を誑しむるものは自らを誑しめず、信仰を説くものは不信仰なり、此の如く數へ來れば現代

の世は矛盾多くして又危険なりと可謂、唯吾人は人生の力と光とを受くるは、本佛輝尊の慈光に浴するの一道あるのみ、聊か所感を述ぶ。

年頭の序

笹川 日堂

思想と生活に、一大變化を來たし、國民其の師に彷彿するの時にたり、是を救済するは日蓮主義を奉ずる者の任務である、願ふに現代の宗教は虚偽と迎合とで粉飾して居る、日蓮上人が「法師は道曲である」と喝破された、根底なき思潮に溺れる人類の行爲は餘りに病的である、何故に人類生存の意義と價値とを認め得ないであらうか。

正義を基本として人生に活動する、これぞ日蓮上人の體験的信仰である、萬難に打勝つ勇氣と覺悟がなければならぬ、命が惜くては大事は成し遂げない、命を惜むと謂ふ中に財欲名欲等の五欲が包まれて居る。正義に感せず肉欲に執着する者は、一種の意業である解意は佛陀の戒むる而已ならず、日蓮主義者の禁物である久遠の生命と其の靈光を認容する事の出来ないのは、天の月を譲らずして池の月に譲る思をなす猿猴と慥ぶ事になる、我等は改曆と共に一層傳道に従事せねばならぬ。

思想界の適藥

川崎 英照

一妙齡の日本婦人があつた、髪の赤いのを氣にしてあらゆる化粧品を買つてつけたが黒くない、彼女は遂に西洋化粧品を買ふた高價な物を展々つけた。然るに彼女の髪は黒くならぬ、髪を赤くしたつた西洋崇拝の彼女は遂に醜い事益々赤くなつた狂ひ死したと云ふ實例がある。何故に高價な西洋化粧品までつけたに黒くならずして赤くなつたであらうか、それは赤くなるのが當然である、西洋婦人は金髪を美とするのである黄金色にするのが西洋婦人頭髪化粧の目的である。

今の日本が二も二もなく西洋を真似たがつて思想界に迄も此弊が波及して居るのは寒心に絶へぬ、純潔なる國民思想の黒髪を西洋の金髪化する事は遂に彼女の狂亂を來しはしまいか、聖日蓮曰く「彼國によりかりし法なればとて此國にもよかるべしと思ふべからず」と、敷島の和錦に織りてこそ、からくれなゐの色もはえけり」との歌とは共に日本現代の思想界の適藥である。

佛教徒のサボタージュ

一ジユ

紀野 俊耀

サボタージュは、怠業の外妨業若しくは、阻業と譯されて居るが、佛教徒で此のサボタージュを始めたる元祖は、念佛門の法然親鸞である、法然は佛教徒の根本信條である、發菩提心を迂回修行の善と斥けて、相絶兩善に對する責任解除を主張し、倍々人間の墮落性を増長させた、親鸞は尚一步を進めて、法然は淨土三部の經を同一他力經として見たが、彼は大量壽經のみ眞實で、他の二經は尙定散二善を説き一心不變の念佛を説く故に自力の分域方便の分際と主張するに至つた(富士川博士) 實に城者破城の道徒永劫無間輕しである、彼等の發菩提心を否定するは、根本的意業獎勵であり、其が爲に世出の兩善に努力せんとする志願力を日本國民に失はしめたは徹底した妨業であり、本佛を彌陀に、本國土を穢土に、佛子を罪の子に間違へさせたは、許すべからざる罪業であらう、日蓮本人のサボタージュ氣分は、明かに念佛徒に依て植付られた事はいなむことは出来ぬ。

年頭の感慨

能仁 一十

多年多端なりし大正八年を送り、更に多幸多福なるべき大正第九の新春を迎ふるに際し、年頭の感慨轉々千萬無量なるものが有つて存するのであります。

回顧すれば様々の形式内容意味に於て、客年程内外を通じて破亂變動の多大であつたことを私の今生の今日迄の生涯に見受けたことはあります。

何曰く何と走馬燈の様で殆んど列擧するの追くがありませぬ。俗に羊歳は萬事が平穩だと云ふのに、悠々な迷信は全く裏切られて仕舞て、佛陀の豫言された末法濁惡の時を益々色濃く事現してゆくのを深く悲しむと同時に佛陀の豫言の偉大を敬慕するものであります。

教誨實位彌下、かゝる時代を善導感化すべく教へられた我々日蓮主義者の使命を思ふ時、私は今更のやうに、其の責務のより多く増大されたことを痛感せずには居られませんでした。

偶言數則

月 翠 生

本宗及び清明會の寄贈せる「國民教化」縣下

林一誌の經營をに置すに就て

我統一誌の經營を元に還す

主任 松 尾 鼓 城

三五の村役場に就て之を檢するに多くは他の廣告類の郵便物と同一視せられ吏員の一瞥にも觸れざるものあり施本傳道も相當考慮を要す。

近時青年會處、女會等の用務を帯び小學教員と會見するの機會多く國民道徳の扶植に就て最も重き責任を負へる彼等は國體觀念の徹底的理解頗る朦朧國の宏遠も樹徳の深厚も科學文明に醉へる餘弊は遂に不滅の觀念を疑ひ勸語の御精神も極めて淺薄に解するに至る。

民力漸養に關する五大綱領中主なるものは國體觀念の養成にあり須らく師範教育に於て徹底せしめよ突堤を決潰して滔々氾濫せる世界的思潮も労働問題も改造運動も此根本緊要の案件を外にして之が解決を望むは百年河清を待つの類也。

青村僧正の機微譯語百回師の獨壇場也と云くは別刷印行して同考に擬つ恰好の布教資料たら

南條殿御返事 是る(春)のはじめの御つかひ自他申しこめまいらせ候、さては給はるところのすゞの物の事もちる(餅)七十枚酒一筒手いちだ河のり一紙袋だこん二つ(二把)やまのいも七本等なり、ねんごころの御心ざしはしなじなものにあらはれ候ぬ。

所 感

城 山

これ建治二年正月駿河信徒の中堅南條兵衛七郎に遣はされたる御消息、當年を追憶すれば感轉た深し、予も亦因みて芽出度初春を迎へん哉

に就て (敬愛する全讀者諸君よ)

統一誌は今を去る二十餘年前御師範本多日生親下の主唱の下に設立されたものである。私は

見報出の經文に契ひ宗門より徐外され給ひし當
時、私は現下の主義に悦服し其後現下の驛居に
附し、熱烈なる火に燃へつゝ内は宗門の改革の
爲に千軍萬馬の間に出入し、外は前門前流に對
する折伏に可なり強剛なる行動を採り、會て京
都妙善寺講堂に於ては智恩院僧侶の爲に追害
を受け、今尚耳根の三針の刀痕は其の記念であ
る。其節統一誌の機關たる我「統一」は二回ま
で私が編輯を預つて居た。年移り星更り年月
は歳々として進み、白駒の影過ぎ易く、宗教界
の狀態も大に異り、又私も師の下を去る十數
年新聞記者として各地に轉住し其間に於ける私
の思想も大に變化して居たのであつた。
私は或る動機より我「統一」の編輯、特に神
代にかゝる研究に興味を有ち、興味と云ふより
か一種の信仰を有ち、法國冥合の聖語に感孚し
根本的融化的理想に憧憬して居た。
數年前私は新聞記者生活の傍ら、私の趣
味たる繪畫に心腸を洗ふべく古都奈良に閑居し
専ら其の研究揮毫に耽れて居たときに、舊師親
下の招きに應じ、三度なつかしき東都の人とな
り、今の「統一」を又々預り申ししたのである
それから數年拜聽を得なかつた譯も承りた
が、其以前よりも一層草創にして張の威力
漲り、又周囲の勢力の擴大せられて居るのに悦
服した。しかしその悦服よりも師の國體觀が自
分の小い頭に考へたよりも既に已に的確に法國
冥合論の歸着を示されて居たのに驚き且つ悦

んだのである。私は私の神代研究の結果其得
たる理想の發表は必ずや諸先輩から大きな眼玉
を喰ふものであらうと思つたのは幸にも當が外
れたのであつた。つまり師親下は勿論、諸先
輩の研究は私よりも既に此の問題に一步先ん
じて居られたのであつて、叱られるどころでは
ない大體歡迎を受けたのは嬉しく感じたのであ
つた。此の以前東京に歸る前に東京に歸ると云
ふことを豫想だもせぬ前に、岡山の「日蓮」に
「法華經と日本國」を書き、京都の中外日報に
「日蓮法華突破論」(二十回ばかり)を書いた、
多少遠慮氣味もあつたがマア大體お構ひなしに
自分の思ふことを述べ(半分は、御師範や畏敬
する田中先生等をも呼捨ての月旦式は無禮な極
みであつた。しかし毎私の精神が、其新聞記
者生活にあつても繪を描いて居ても終始教界問
題に頭の動いて居た證據として見ていたときた
い。遠く支那に新聞に従事して居ても恐らく私
ほど彼の如き地に於てすらも精神界のことを眞
面目に日々の新聞に論議したものがあるまいと
自信して居るのである。(樂の効能者みたやうで
中譯がありませぬが、私の推察忍水時代の事
を御存じなき方には一寸一口申上げておかぬと
話の順序がありますから)
五年前東京に歸り「統一」を預つた私は「統
一」に對する發展上に於ては大に興味を有ち大
に理想を遂行しやうと思つた。私が「統一」を
預つた當時整理して見たら一千部に足らない讀

者であつた。當時二十年近くの歴史を有つて居
る我「統一」がツツ七百か八百の讀者、これ
が何うなるものかと呆れた。しかし印刷費は三
十圓か四十圓であつて、宗門から一定の補助が
あり經營上には左程苦痛はない、私は驚然に
有りとならぬ方法を以て讀者の開拓に骨を折
つた。間もなく三千四百の印刷をするやうに
なつたのは我ながら其功を誇りたかつた。前途
の開拓に就て讀者の領域が八千位は得られると
目算が就いて勇み進んで餘事を顧みなかつた。
私は雑誌經營に就ては可なり經驗を有つて居
て、(手前味噌で済ませぬが)、私が東京に歸
る以前まで大阪で經營して居た「國風」これは
一時七千まで讀者を有して居た、月刊雑誌とし
ては關西切つての多數印刷物であつた、今共同
經營と云ふことにして大阪朝日新聞記者渡邊
亭氏に一任してあるが、今でも四千位の印刷高
はあるとの事である。雑誌は生物である、育て
れば幾らでも延びるものである。
然るに爰に測らずも「統一」の開拓に就て一
大難關を生じた。それは歐洲世界戦争である。
この影響を受けて紙の騰貴、印刷費の暴騰殆ん
ど二月目位に何割又何割と云つて値上げをして
來たのであつた、少々冊子の代價を値上げをし
た位では追附かぬのであつた。一時は補助を受
けて居る筈の方へ却つて此方から逆に補助をし
て居る奇なる事象もあつた(補助に對する雑誌
の配本代の方が高くなつて)此時の苦痛は實に

名狀することの出来ぬものであつた。頁を減ら
してみたり、冊数を切りつめてみたり様々手段
をめぐらして何うやら道うやら生命をつないで
來た。此間に一冊十錢まで値上げをしたが、其
爲にまだ凝固なかつた新讀者はドシ／＼逃げて
しまつた、一ヶ月煙草一箱にも及ばぬ冊子代
：貳錢參錢の値上げで斯くの有様かと慨歎もし
た。

果ではあるが、總務たる井村師の總監宜しきを
得ると、講師野口師外諸講師の徳に基くもので
はあるが、幹事諸氏の熱心なる幹旋に依るもの
も多い、此他事務員の働き又隠れたる人々の此
に到るべく建築助言等をも認めねばならぬ、つ
まり斯の此に至りし時間、即ち閉に於ての歴史
を尊重せねばならぬ、此の歴史を知らざるもの
が、只己れの新らしき一個よりする見地より割
り出して突如として一攪拌をなす時は此に破滅
を生ぜねばならぬが、幸に統一開は隆盛に伴
ふものに得てして有りさうな弊害もなく、急激
に向上し發展し圓満の境を確したは、偏に心
に信念を把持せる幹事諸氏の謙讓和平の至誠に
基くところである、斯くの如きは教界の模範と
して天下に誇るに足るであらう。

彩を放つ雑誌として育て、みたくも思つても
見た「統一」は宗門的經濟關係の内情があり讀
者との種々の考ふべき事柄もあるから統一開と
しては別に内容豊富大雑誌を發行しても宜か
らうなどの事も考へても見た相談もして見た。
しかし之等よりも、矢張り「統一」を統一開
で直營するのなら申し分はない。斯る考も頭
の半分を往來して居るときに、御師範から統一
開の方へ戻すやうにとの事である。師範の令は
此場合絶対である。私は只管に承知しました。
「統一」は統一開に歸つたら、寄附金もあらう
讀者も殖えやう、雑誌も面目を一新して容大を
示すであらう。事務は誰が其の間に立つか知ら
ないが編輯は必ず毎月一回編輯會議を開くこと
になつて居て、私も之れに參與せよとの事であ
るから、以後私も全然關係が離れるわけでは
ないのである。そして私がどんな人々と編輯上
相談することがあつても、新に出来る雑誌なら
現にかく、從來の歴史附の「統一」としては、
(一)宗門的精神の持續(二)中心人物への擧引
(三)法義的に而して國家的に、此三要件は私の
編輯會議に浸む信條であることを申し上げてを
く。

道んな始末で、私が最初考へて居た理想は全
く急激な物價騰貴の爲に中折したのである。そ
れ以來専ら守る一方の方針で、殆ど外から見
たらサツカし意氣地なしと見られたであらうが私
の經驗から割り出したところでは此「守る」と
云ふより外方法がなかつたのである、若しあの
場合攻勢を採つたならスグ縮手を被るのである
から……何しろ五年前から印刷費だけでも實に
二十割の値上げであるから……

の、中にも、私が一個の仕事として一書生をし
て賣らしめて居た書冊も之を幹事の設定と共に
移した爲に大發展をした。之から押しても今
私の統一誌が今日の漸く納つて來た統一開に
於て公認されたなら一層隆昌の境を示すであら
うと云ふ考へもないではない、此事に於ては八
年春頃井村總務から相談もあつて私も承諾
をしてをいた事である。しかし、私自身の考へ
では古い因縁關係を有て居る私が「統一」誌を
愛するの念は他の誰人も及ぶまいと思ふから、
歐洲戦も想んだ今日、ポチ／＼「守る」から離れ
て唾手一番發展策に盡して見やう、精神界に異

大昔からの文句附でお話ししたところはツツ
ク之れだけの事である。ツマリ這度「統一」の
上に變更の起つた事情を申しあげた次第に過ぎ
ぬ。
只讀者諸君に記憶してをいて頂きたいのは、

東京市に片々たる幾千と云ふ数の雑誌が、此の数年間に經營の困難から半數に減した事(宗教雑誌亦然り)である。此最困難の時をマル...

それから紙末に此間事務に熱心であつた書生の三浦傳三郎君と好意を以て良く手傳つてくれられた...

の加命を受けて居る。チツと遊ぶと云ふことの出来ぬ私は決して國家に損害をかけてはならぬと思つてゐる。若し其れ他日奮然として再起した節は大に御同情を賜りたい。私は四十の坂...

なる宗教を擁護すべき必要を論じ法華經の卓越せるを立證せらる。本多大僧正は極めて莊嚴なる口調と敬虔なる態度を以て帝國の大使命と建國の眞意を高唱せられ其の理想的な人格者として日蓮上人を第一人者と...

統一團報

名刹存續の爲め 金壹萬五千圓を寄附す 若松出身成功者 佐藤勇太郎氏之美舉

若松市會議員佐藤勇太郎氏令弟當時時月市北野町一丁目二番地佐藤勇太郎は、今國難先迫福のため、菩提寺若松市甲賀町妙法寺へ基本金壹萬圓及び庫裡寮棟新築工費金五千圓を寄附したり。同寺は願本法師宗開祖...

本多大僧正の御活動

十月三十日遠州見付町宗門の靈地玄妙寺を中心とする遠江日蓮主義傳道會及同地方智識階級の日蓮主義研究機關たる四思會の秋季大會に御參列の爲本多大僧正...

義納芳名

- 金五拾錢也 福島美世子 金壹圓也(小供會) 新實徳太郎 金壹圓也(小供會) 塚本フミ 金五拾錢也(同) 増田法子 一圓壹角一臺也 早川太吉

統一閣 月報(十一月)

日曜定期講演會 二日 聽衆四百、我觀日蓮主義 原田顯振、小松原法雄 妹尾義郎、教機時國鈔 本多日生

統一閣附屬講會 每日日曜 子供會 青年會法華經講義

統一閣 月報(十月)

日曜定期講演會 五日 聽衆五百、日蓮主義と勞資問題 松尾鼓城、本佛の化導 木村日保、當體義鈔 本多日生

統一閣附屬講會 每日日曜 子供會、十二日は世田ヶ谷松陰神社へ遠足

開會の辭

我が國民の自覺 小泉中將 思想問題の歸結 本多大僧正

人の一生

本多大僧正は極めて平易に然も宗教の根本義を説かれたれば比較的理智に乏しき職工と雖も佛教信仰の要諦を味ひ未だ曾てなき真感化を興えたりと同局員は隨喜せられたり。

開會の辭

小泉中將は概近世界の大勢より我が國狀を論じ國民の一大自覺を促され本多大僧正は東西思想の長短に就き嚴正なる批判をなし東洋文明の精華を力唱せられ遠く徳なく爲めに登千の聽衆肅然として聲なく透徹したる所論と大僧正の偉大なる人格に靈化せられたるもの、如し、因に同部長は本門の篤信家矢野茂氏の御令息にして亦熱烈なる信仰所持者なれば爾來同地方の布教一層の隆昌を來すべし。

十月廿一日 本多大僧正午前十時より縣立中泉農學校講堂に於て同校生徒の爲めに一場の講演をなす。 人格の完成 本多大僧正 哲學的觀念と宗教の信仰により現代青年の思想を確立すべきを諒々と説かれ思想の過渡期にある青年學生の要求に極めて適切なる感化を興へたり。午後二時より中泉町公開堂に遷る。

精神修養の基礎 川島町長 國民の模範的人格者 小泉中將 國民の模範的人格者 本多大僧正 小泉中將は世界思潮の混濁せる今日我が國民は最善

十三日午後一時、市内丸太町教育會館に於て、警官約五百名に對し三大自覺の題下に本多管長親下の御講演ありたり。

千葉縣聯合大法會

概況

縣下聯合大法會は十一月二十、二十一、二十二日の二夜三日間、當第五教區永田光昌寺に於て執行せり。是れより、寺禮廳力し、堂宇の修繕を加へて大會を迎へたり。當日は降り勝ちの天候も折能く快晴となり、櫻花四境に轟き、門前の綠地に盛んに參拜者を入れ、餘興及び商人は數多境内に市を爲し、群衆内外に滿ちて廣き寺内も觀望を觀せり。法要は音樂天童及行道の式を以て常樂院日蓮上人の三百遠忌報恩、七里法華檀信徒先代々諸靈の追善、並に陸海軍戰病死者の追悼等を營み、中日には管長親下の名代として野口權大僧正、關田僧正出張せられ、雅見の如きも四十餘名の多きを見て法席の盛んなるを知るに足る。布施は施本は勿論布教師其他の辯士盛んに法鼓を鳴らし加ふるに手代木氏の巧妙熱心なる統一節日蓮上人御傳は尤も機縁に投じ、三日間晝夜勞を厭はず出演す。又宗義研究所の學生等屋外布教を勤みて何れも法益夥からず、第三日目の午後は光昌寺として千人供養の法事ありて續いて賑ひたり三日間の出席辯士及演題左の如し。

- 開會 五十嵐布教掛
 日は東より出て、西を照す 土屋 眞 容師
 日蓮上人の佛敎 秋葉 日 慶師
 開會 教 栗原 顯 有師
 須く信仰の徹底を期すべし 土屋 眞 生師
 我等の行くべき道 金坂 乾 受師
 正しき國民の自覺 成島 日 衛師
 總の貯蓄 齋藤 日 章師
 廣部 乾 山師

- 七里法華復興論 野口權大僧正
 日蓮主義大綱 關田僧正
 南無佛 高貫見龍師
 直心 水野乾心師
 新しくして信仰に入る 吉井光師
 日蓮主義の信仰 長岡有應師
 人心の改造 吉見俊教師
 信仰の要義 酒井眞隆師
 如來の知見 竹内顯領師
 信の力 初芝智泉師
 廣徳益 渡邊布教掛

日宗新寺の 建立地鎮祭

新道側に安樂寺

知法治國、立正安國經を教義とする日蓮宗に於ては豫て四日市の法華行者達が熱烈なる信仰に基き企劃中なりし準備整ひ愈々新に
 ▲一寺を建立 する事となりたる結果篤信家なる山路元吉氏の寄進にて諏訪新道三重嶽嶽裏に敷地を卜し寺額を安樂寺と號して建立する事となり二日午後三時敷かなる地鎮祭を執行されたり、式は先づ場内の中央に式壇を設け大鏡餅、法衣は古例に依る木の實數種を供へ四邊の莊飾何れも佛式の正法に違ひ莊重を極む
 ▲式典の順序 は劈頭三寶の禮あり次に勸請の事方便の事、自我の偈、散華等あり斯くて此日の地鎮を佛に告ぐる慶讃文は願本法師宗管長本多日生現下の代理野口日蓮師に依て奉唱され次で訓誡、行道、題目、同向等の諸法事あり最後に三階を修し法衣を飾る
 ▲執行の諸師 は野口日蓮師の外に國友日景、長谷川日濟、草切信榮、清水一乘の諸師にて何れも宗門一如の法衣清々しく整列の信徒意からざりしが其重なる

日蓮主義講演

四日市の日蓮主義講義を中心として幾多の法華行者が寄進の下に安樂なる新寺を市内新道南方田圃中に建立する事となり其の地鎮祭、二日舉行せしことは前號既に報せしが其執行として願本法師宗管長本多日生師代理に權大僧正野口日蓮師の來演を幸ひ同夜六時より市立圖書館にて日蓮主義の講演會を開けり參聽者百餘名にして智識階級の人々多く殊に學生も多數見受けしが草切信榮師の「聖日蓮」と題する講演ありて後野口日蓮師は「改造文明と日蓮主義」の題下に熱誠なる講演を試み多大の感動を興へ大に思想の糧を供給したり。(同新聞四日掲載)

新寺建立地鎮式文

南無本門壽童之本尊別未法大師師日蓮大法將經卷相承日什大正師正義弘通之諸大先師 哀懇納受難時大正八年十二月小治良、佐藤柳子、服部たか子其他四日市市統一團員各氏一統發願と爲り大日本宗廟の東枝櫻川の南勢州四日市市清淨の地、卜し本日、以て新寺建立地鎮祭式を舉行す願くは佛陀三寶感應あらせ玉へ。
 初も寺塔建立は因縁多故にして佛陀光明の照す所佛院光明の運まる所寺塔建立すと交誼に以て不可思議大因縁也昔諸聖歡喜の至ならず福川經には寺塔建立千種の功德を擧げ法華經には聚砂爲佛塔得見恒沙佛と説けり其他經論枚舉に遠あらず此地の繁榮期すべきなり此日天氣晴朗温風如春天華自然に降り地落氣池魚躍松菊傲霜、河漢深として音樂、奏す實、是れ廣宣流布世界平和の相也此功德佛日增輝京道繁榮妙法廣布邪法廢滅弘通不退功無虧。

伊 請

此地信男信女國士國女大長者現當二世所願圓滿總ては無二緣若成佛道鐵圍沙界利益周遍ならしめ依而地鎮式文如件。
 南無妙法蓮華經
 大正八大戰講和世界聯恩年十二月二日
 願本法師宗
 管長大僧正 日生
 代 權大僧正 日主

當日式辭は右の如くにして法式嚴正、列席僧員は管長代日主師の外に僧正國友日景、大學院長谷川日濟、同草切信榮、中學統清水一乘、沙彌松井常誓の諸師なりき。
 大阪生玉村町圓林山堂閣寺は開基常樂院日蓮上人三百遠忌報恩之爲、住職京藤義應師檀相馬小島三、川口常吉、相馬布佐衛子發起の下に檀徒一同數千圓の淨財を寄捨し、本堂の改築を劃し、十一月廿二日日蓮上人富山神通川神終焉を告げらるゝの日を卜し、僧正証川日堂師を招し盛大なる落成入佛供養を營み夜間大講演を行ふ、課題諸師は左の如し。

大阪堂閣寺と日經 上人遠忌

開會の辭 京藤 義應
 能教世間苦 三谷 會 善
 廣宜流布の大願に力を副よ 大森 日 榮
 國民覺醒の秋 金 光 孝 碩
 折伏は慈悲の結晶 萩原 日 道
 佛法の定否を試みよ 証川 日 堂
 聽衆滿堂法雨に浴せり。因に住職檀徒相馬、川口氏等數日同寺に請掛け飲食を忘れ盡力せられしは信徒として模範的の者と云ふべく願くは全國の檀信徒廣宜流布の大願に力を副へらんとす。
 大導師外出席者、上田智量、萩原日道、金光孝碩、大森日榮、川崎木照、三谷會善の諸氏なり。

營 口

左の記事を同地新聞記事に得たれば轉載す。
 日蓮主義護持會設立趣意
 法華經は佛敎の風髓、諸經の王なり佛の出世は法華經を説きて以て一切衆生を救濟せむとの誓願にあり日蓮聖人は法華經の行者として不朽の教訓を殘し給へり、余等幸にして此の正法の末流に浴し正義の信仰を把持し安心立命の實に供せむとせり、前に願本法師宗の僧江見乾丈師の來管に逢ひて聊か正法正師を得たる心地し、之が微意の貫徹を期す。
 按に正法護持會を設立し爲法爲國日蓮主義の宣揚に勉め世の好侶伴たらむとす、志を同うせらるゝの士は是が主旨に賛同せられ御入會あらむ事を希ふ。
 大正八年九月三日

- 右發願者 川 越 重 治
 重 松 玉 次
 佐 藤 臣 少
 山 西 又 一
 市 田 三 郎
 間 庭 織 之 助
 間 生 卯 之 助
 會は當分の間營口南木街元山口馬車行隣へ置く。
 本會の事業
 一、毎月第一日曜夜 法華經講義
 一、同 二日曜夜 哲學研究會
 一、同 三日曜夜 日蓮聖人遺文講義
 一、同 十二日夜 法要及説教
 一、隨時有志家庭法話會を開く
 一、日蓮主義公開演說會隨時開催
 一、懷疑、煩悶者の相談相手
 一、其他必要と認めたる事業
 一、入會志望者は佛耶の如何を問はず入會するを得、但し會費を要せず
 一、本會維持は有志の寄附に依りて爲す

朝 鮮

朝鮮木浦天晴地明會講演

日 光

日光立正會生る
 世界の勝景を以て任ずる同地の有識階級發起となり東洋固有の文明を發揮し國民思想の統一を圖らん爲め日蓮主義の鼓吹と實行を本領とせる日光立正會を組織し十一月二十三日午後一時を期し同地の最勝院に於て東京法華會より文學士守屋貫教氏を聘し其の發會式と

國民思想演義講演會を開催せしが聴衆満溢にして其大の感動を興へ大盛況なり。

東 参 野田法華寺會式晚秋の候新曆十一月二十八、九日毎歳不易の宗祖報恩會を行ふ御寶前には餅柱に蓮花の標をあしらし修飾の美を盡し處修せり信男女の來拜數三百餘名頗る盛會なり。

迷悟の關係 野中 通 玄
宗祖の御徳 西山 日 諭
明 聖 說 教 野中 通 玄

佛陀の遊化 野中 通 玄
田原實行等は新曆十二月三日舊十月十二日夜餅柱等の飾をなして莊嚴せり報恩修法後講演等あり參詣者は舊來より非常に多數なりとぞ演説は午後八時より開演す。

同日 夜
主 義 と 其 鼓 吹 野中 通 玄
本 章 觀 西山 日 諭

栃 木 陰曆十月十二日栃木縣鹽谷郡高根澤村妙顯寺及妙顯寺に於て御會式勸修布教師秋葉日度師等に千葉縣より出張日蓮主義の國家觀に就て兩回三時間の長廣舌を振ひ多大の感動を興へたりと云ふ。

和 氣 備前和氣通信
昨大正八年度に於ける同地の布教として別に大なる事なきも左の改宗者ありしと。
眞言宗 二戸 天台宗 二戸
不受不施 三戸 天理教 一戸
にて原田日勇師が住せる本成寺の檀家に接したり。
弘通所參詣日は例の如く二と七の日午後七時開會能仁一十師の法話。

津 山 日蓮主義青年會上ノ町弘通所に毎月二十七日の二回開會を催し會員及び一十師の講演。
○日蓮上人御會式並に日蓮上人三百遺忌、十一月二十日午後一等本蓮寺に於て法要嚴修、能仁一十師より

日蓮上人に關する法華の事蹟を語られ一同隨喜の涙に咽びた。

豐 橋 十月九日夜、服部家、日本國と日蓮上人松本堅晴、同十二日夜、宗祖御會式、日蓮上人學生の主張松本堅晴、筑前野間龍の口御法蓮野口旭照女史、同十三日正午より、日蓮上人の清操加藤圓順、日蓮上人誠後の概況松本堅晴、同十八日夜、立正會、日蓮主義の各方面山本通辨、建國の根本精神加藤陸軍少將、同二十二日夜、婦人會、日蓮上人正傳杉田常收、日蓮上人の人格松本堅晴。

播備聯合布教會

例年春秋二季開催せる播備聯合布教會は大正八年度秋季際として姫路神戶間に催し先づ。
十一月十九日夜 (姫路妙善寺) 八十名
開會 辭 吉 永 日 洋師
力 の 泉 熊 井 本 光師
日蓮主義の將來 高 田 日 暢師
十一月二十日夜 (妙立寺講堂) 百名
開會 辭 中 川 日 史師
聖者の日蓮を偲ぶ 川 崎 英 照師
個人の信念と社會生活 能 仁 事 一 師
十一月二十日夜 (本町明治幼稚園講堂) 三百名
開會 辭 堀 中 佐
金剛定の山に登らん 川 崎 英 照師
社會改造の意義 熊 井 本 光師
日蓮主義の將來 高 田 日 暢師
民力演義の徹底 能 仁 事 一 師
十一月二十二日夜 (神戸布教所講堂) 二百名
開會 辭 熊 井 本 光師
日蓮上人 川 崎 英 照師
民心の改造 吉 永 日 洋師
三大秘法 高 田 日 暢師
社會奉仕の基調 中 川 日 史師
十一月二十三日夜 (明石國樂寺) 二百名

日蓮主義模範結婚式

山武統一閣支部員東金町片岡善助翁次男伊三郎氏は今山下池原町薩摩家諸房牛兵衛氏を頼梅子嬢と婚約なり去る十一月十七、十八日兩日に互り之が祝典を舉られ本閣支部長成島日衛及顧問山岡信正にも招待状を發せられ山岡信正は祖先の寶前に法華を捧げ又御遺文の一節を讀んで懇ろに其因縁の深を説きて之が式典を舉られたり、實に上總七里法華に未だ會て聞ざる信仰的結婚式なり、吾黨斯くして世に益々光輝を發すると共に七里法華革新の一氣運と供にこれより生ける法命を信仰的に理想化するを得ん。

龍存師の明著 青森市 大和生
況來哲學界に精神界に關する有益なる著述の多數出版せらるゝは時節國家の爲め欣賀に堪へざる所なり而して靈魂の存在に關して二三の著述なきにあらざるも本問題に日蓮聖人の法華經論は絶えて研究せられずとして憂鬱の氣に興奮して筆を採られたるものなり日本佛教の精華を光揚せんとする至誠あふれて本書をなす、著者が自照錄に過ぎずと云ふは畢竟謬通のみ、引近宏傳、主義的確、苟も法華信仰者と云ふもの、又法華を研究せんと思ふもの、此書を座右に備へざる可らず、定價貳圓九拾錢、送料十二錢、編輯所にて取次もよろし。

天台對照論述法華經要義 遺は清水龍山師の著なり、龍山師は人し知る我宗學者にして、本書は由來我日蓮聖人の法華經論は絶えて研究せられずとして憂鬱の氣に興奮して筆を採られたるものなり日本佛教の精華を光揚せんとする至誠あふれて本書をなす、著者が自照錄に過ぎずと云ふは畢竟謬通のみ、引近宏傳、主義的確、苟も法華信仰者と云ふもの、又法華を研究せんと思ふもの、此書を座右に備へざる可らず、定價貳圓九拾錢、送料十二錢、編輯所にて取次もよろし。

本化聖典大辭林 第五分冊出たり。正價金貳圓五拾錢。發賣元は東京下谷區鶯谷國柱產業株式會社書籍部なり。本宗信者必ず所蔵すべき要書なり。

△新刊紹介▽

毒鼓創刊再版 「毒鼓」は日蓮主義宣傳の機關なり世人誤て日蓮主義を宗教の名と解す、不可也、這は思想道徳政治經濟文學社會等一切に對する根本性命にして亦その光の源なり現代紛々の諸問題は只此主義によりてのみ徹底解決を得べし世界改革の原動力、問題解決の鍵、乃し本誌によりて提供せらる。世人よろしく一先づ一切の考察を中止して茲に新たに想壇に響降せる曾て思ひも付かざる新思想に接して曾て經驗せざりし最新文化に浴すべし「毒鼓」は斯かる必要に因りて世に出でたりと宣言して現れたる「毒鼓」は購讀の手、海を隔る如く繁く、初版は間もなく賣り切れ、今回再版をなしたる由にて、越大にして内容充實せる同誌の世間を覺醒したる推して知るべし、其號に限り七

千葉縣市原郡泰安寺
秋葉日度
統一閣方
自慶會本部

金澤市
六斗林本覺寺
始坂町本長寺兼務任職
窪田純榮

恭賀新年

大正九年一月一日 年始交換廣告

顯本法華宗務廳

鈴木日雄
國友日斌
森川日修
石川日隆
木村日義
大森日榮

常總統一團
支部長 成島日衛
加藤瀧藏
星野聖祐
山武統一團
支部長 成島日衛
山岡日紹
中村日錦
篠原藏司
大野傳兵衛

正徳老 柴原利平治
吉ヶ原

山根日東
牛込原町二ノ三十
常樂寺住職

寺院合併事業進行中多大忙年賀の禮を缺く。幸に身體頑健

恭賀新年

大正九年元旦

年賀交換廣告

主催者 年賀交換廣告會

▲廣告は本會總裁を除く外は凡て同一活字を用ひたり。▲又略イロハ順に従つて序列せり
▲今回の廣告は多く申込みに限り掲載したり▲交換廣告なれば各自の賀辭は略したり

總本山妙滿寺住職 自坊 品川妙國寺	淺草區清島町統一閣内 長谷川義一 妹尾義郎	西澤明花	吉美岡本圓正
本多日生	新國家安泰 原田日勇	福岡縣大牟田市 日蓮主義天晴會	千葉縣長生縣新治村 下太田萬光寺住職 渡邊乾航
品川本光寺 今成日誓	總本山妙滿寺 萩原日道 銀井乾升 金井孝碩 有田宏道 清水純榮	西山日諭	東京市牛込區 川奈錠作
品川清光院 伊保内教精	愛知縣知多郡緒川 長谷川日濟	統一團本所支部	下谷區谷中初音町四丁目三 本授寺住職 笠原琢瑞
雜司ヶ谷本教寺 井村日威	東京本郷區駒込片町 三十番地 太田屋 西山吉五郎	伯耆國松崎本立寺住職 富田林惠	東京市青山南町六丁目 吉田珍雄
福岡縣三池郡二川村渡瀬 新興寺住職 出海俊義	千葉縣宗典講究所 所長 竹内無着 講師 成島日衛 土屋賢生 栗原顯有	顯本法華宗 評議員 飛山日甫	姫路五軒邸妙善寺 吉永日洋

恭賀新年

大正九年元旦

年賀交換廣告

主催者 年賀交換廣告會

播磨印南西神吉妙信寺 高田日暢	千葉縣宗典講究所 所長 竹内無着 講師 成島日衛 土屋賢生 栗原顯有	芝區白金三光町二七六 番地 内海穎二	福岡縣八女郡羽犬塚町 大崎官逸
北海道江別町法華寺 田久保日城	千葉縣 夏目智誓	淺草區永住町妙經寺住職 野口日主	名古屋市八百屋町妙行寺 草切信榮 <small>千葉縣長生郡二宮 本郷村日來光寺住職</small>
東京府下瀧野川町 田端四一七 田中治雄	大 阪 市 長尾猶之助	能仁一十 作州津山上ノ町 本蓮寺住職	日本橋坂本公園 窪田貞二
竹下龜太郎	姫 路 中川日史	岡 山 能仁事一	東京上根岸百十五番地 柳生正生
新正法興立 第三教區青年布教團	國家多事の年元旦より吾人日 蓮主義者の提攜精進を祈申候 牛込區原町 醫學士 永橋榮治	千葉縣山武郡片貝村 妙覺寺住職 大橋日襲	南品川五十七 山田豐次郎
(本順改) 高木日靖 品川本榮寺	大阪東區西高津中寺町 蓮成寺 上田智量	靜岡縣富士河畔北松野 大津日文	靜岡縣見付町玄妙寺 山本通辨

恭賀新年

大正九年元旦

年賀交換廣告

主催者 年賀交換廣告會

千葉縣印旛郡酒々井町
本佐倉經胤寺住職

前田 日應

東京染井蓮華寺

松田 宏榮

豐橋市清水町
妙圓寺

松本 堅晴

鼓城 松尾 清明

共鳴會

藤澤 智明

坂本 泰造

統一團支部

▲例月二十四日公開講演
(夜間)

小石川區駕籠町七

後藤 秀太郎

小石川區大塚仲町五一

島田 惣五郎

品川 妙蓮寺

笹川 日堂

萩日蓮主義研讀會
萩護國少年團

紀野 俊耀

東京市淺草區三好町
十二番地

岸本 覺也

大阪生玉前町堂開寺

喪禮 京藤 義應

日蓮主義青年團員

水野 三太

先づ自覺せよ
次にゴマカス勿れ

顯本法華寺

有志談話會

京都府木津町妙樂寺

三谷 會善

廣島市新川場町
本照寺住職

島田 日剛

名古屋 市
靈山寺

清水 一乘

千葉町本圓寺

廣部 永眞

川島 松雄

大原 亮

木原 彦

幅原 政吉

小島 傳平

齋藤 重司

龜井 利一

中村 壽一

齋藤 日章

小西 日喜

熊井 本光

三好 信道

秋山 乾英

三橋 會要

川崎 善叔

恭賀新年

田村佐太郎
本橋利一
早川太吉
加藤寅五郎
山本嘉七
宅間清太郎
久保田雅己
中村藤吉
坂本泰造
中澤平五郎
勝田茂
中村光三郎

謹奉賀新年候 謹言

伊而各聖の御健勝を祈り
尙昨年中院舎新築に就き
御同情を感謝す

大正九年一月一日

青森市沖館
青森慈惠院院主 鎌田申太郎

日宗各寺院御中

産婆並ニ見習生至急募集
看護婦

見習は産婆看護婦學校に通學させ優待
す

東京市赤坂高樹町十一

柿原看護婦會

電芝三四二四

主治

天下無比 松鴉目藥
まっとうめくすり
○トラホーム○眼瞼内面三顆粒
○流行目○起珠○血目○爛目○
○熱目○打目○其外○火傷○凍傷
○蟲毒○切傷○腫物○一切

定價貳拾錢

小石川區春日町十六番地

取次所

芹

田

日宗法衣專門

謹賀新年

飯田法衣店

京都市佛具屋町五條北

振替口座大阪六八七

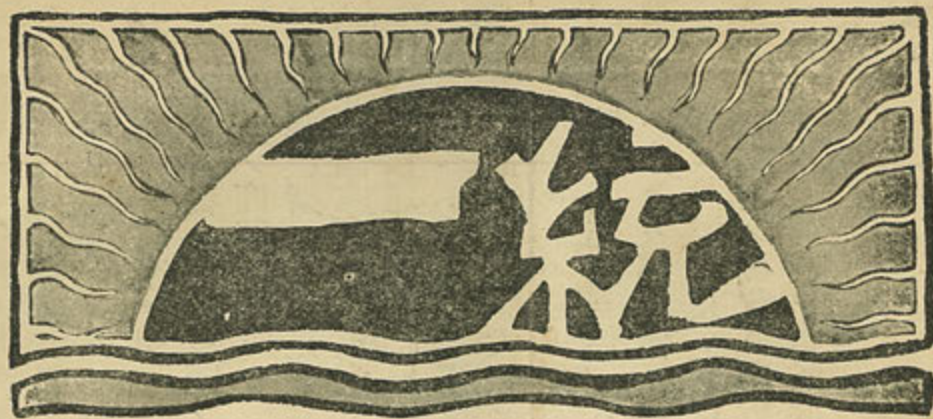
日本橋區坂本公園附近

加賀料理 加能亭

酒は芳醇のキ一本にて肴は百萬石
の旨味氣質

定價表ハ御申越次第
何時でも御送申上候





(號九十九百二第)

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正九年二月一日發行(毎月一日發行)

賀正

念珠ならは小野嘉助店へ
日蓮宗各本山御用達
顯本法華宗妙滿寺御用達

御念珠各種
弊店の特色は實用を旨とし從來
調進仕り候へば多少に不拘御用
命願上候

京都市寺町通鎗藥師下ル
念珠 **小野嘉助**
電話 中二六〇八番
振替口座大阪一九七二〇番

布眼の藥 効能、たゞれ目、かすみ
目、うち目、つかれ目、はやり目、トラホ
ーム等
價壹瓶、拾五錢、廿錢、卅錢、五拾錢、
七拾錢、壹圓

血の藥 定價二包入拾五錢、十
田 五包入壹圓、効能、男
女ちの道、産前産後、めまい、たちくらみ、
時候あたり、氣絶、のみすぎ、酒毒、婦人
病、貧血疾、風邪

千葉縣山武郡源村上布田參百番地藥王寺
布眼藥 **本舖 齋藤 日章**
田血の藥 (御注文は總へて下記振替に)
賀正 (振替東京第六七九一番)

日蓮各宗 寺院 御僧

法衣 草木 直に御聯想下
京都 三條通鳥丸東入ル町
草木本店
電話 中七三五番
振替口座東京二一五五九番

東京淺草區三好町二番地
草木支店
電話 下谷三四三四番
振替口座東京二四五六八番

荷も佛具を調製する敬虔心を以て奉事仕候。

佛像佛具 調度所
位牌木鈺 宮殿幢天蓋一式

▲普通品定價郵券貳錢封入送呈
總本山身延山
總本山妙滿寺
大本山本國寺
日宗各教團

京都寺町四條南大雲院前
辻井岩次郎
振替大阪八一五七番
電話 下三二五八番

佛壇、佛具一切卸小賣
各宗御木山御用道
畫佛表具師 長距離電話中二七八三番
大 振替口座東京二〇七三番
佛 同區小橋東入

卸部 三法堂 藤田總治
各宗御木山御用道
畫佛表具師 長距離電話中二七八三番
大 振替口座東京二〇七三番
佛 同區小橋東入

小賣部 三法堂佛具陳列場

發行所東京市淺草區北清島町十四番地編輯兼發行人松尾英四郎△印刷人鈴木日雄(▲本誌定價一冊十三錢郵稅五風)

時言

大詔煥發——民約の舊夢——過激派の秘密語——佛教と民主國——
現代の大患——不謹慎の言論——平和の喜悅——友邦の協同——國
家の負荷——奮勵自強——萬國の公是——浮華戒飭——一心協同——
——一心精進

- | | |
|----------------|-------|
| 佛敎信仰の正統 | 本多日生 |
| 佛徒唯一の誓願 | 本多日生 |
| 日本國と法華經 | 本多日生 |
| 日蓮主義敎義綱要 | 井村日咸 |
| 心性の開發 | 笹川篁堂 |
| 基督教徒としての大矢氏に與ふ | 金鳥英夫 |
| 記事報道十數件 | |
| 脚河邊の吹雪 | 野村香明子 |